

米国世論の戦争に対する選好とジェンダー観念： 『美しき魂－正義の戦士』のフレームが 戦争の正当性に与える影響をめぐる一考察

Public Opinion on War and Gender Stereotypes:
“Beautiful Soul-Just Warriors” Frame and War Legitimacy

H30助人5

代表研究者 岸 野 幸 枝 Consultant A.T. Kearney
Yukie Kishino

Under what conditions do people give permission to take the lives of strangers through war, and what types of social ideas increase their preferences for war? This study aims to answer these questions by analyzing the attitudes and preferences of public opinion toward war by introducing the perspective of gender and international relations theory. In particular, this study examined the power of the frame of "Beautiful Soul – Just Warrior," where brave male soldiers save vulnerable female victims by testing seven hypotheses.

In the first set of hypotheses, I examined whether the frame of "Beautiful Soul – Just Warrior" increases public interest in war (Hypothesis 1), shapes worldviews about one's own country and others (Hypotheses 2 and 3), and increases preferences for war (Hypothesis 4), compared to a frame that focuses on self-interest. (Hypothesis 3), and to increase the preference for war (Hypothesis 4). While Hypothesis 1 has limited support from the analysis, Hypothesis 2, 3, 4 was supported by the data.

In the second group of hypotheses, I predicted that the influence of this frame of "Beautiful Soul – Just Warrior" on public opinion's interest in war, worldviews, and policy preferences has been supported by traditional notions of gender, in which men should be the protectors and women the protected. In the second group of hypotheses, we expected that the traditional gender role where the protector is male and the protected is female (Hypothesis 5) and the degree of individual-level empathy with gender stereotypes (Hypothesis 7) would affect the effects examined by Hypotheses 1, 2, 3, 4. In addition, I also tested whether war legitimacy increases if a protector is a U.S. female soldier, the symbol of advanced woman, and the protected citizen of the conflict zone is a man (Hypothesis 6). However, only limited data supports Hypothesis 5, 6 and 7.

研究目的

人々はどのような条件下で、出会ったことのない他集団を敵として理解し、他集団に対する軍事攻撃を正当なものとして受け入れるのか。

本研究では、米国世論の軍事派遣をめぐる選好を分析することで、上記の問いに答えることを目的とする。とりわけ、世論研究にジェンダー 国際関係論の視座を導入することで、伝統的なジェンダー観念に沿って戦争を語るこ

とが、軍事派遣の正当性につながることを明らかにすることを目指す。具体的には、本研究は以下の二つの目的を持つ。第一に、「米国の勇敢な兵士が、無垢で脆弱な紛争地女性を敵から救う」という、『美しき魂－正義の戦士』のフレームによって戦争を語ることが、米国世論の戦争に対する関心を高め、自国と他国をめぐる世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高めることにつながることを、本研究では解明する。第二に、『美しき魂－正義の戦士』の影響力は、②救済者が男性であり被救済者が女性であること、および、人々が伝統的なジェンダー観念を信じていることにも支えられたものであることも検証する。分析の結果、一点目については概ねデータによる支持を受けたが、二点目については限定的にしかデータの支持を受けることができなかった。本研究では、二点目の実証が困難であった原因についても考察する。

概 要

どのような条件下で、人々は、戦争を通して見ず知らずの他者の命を奪うことを許可するのか。また、人々の日常生活を規定しているどのような社会観念が、彼ら・彼女らの戦争に対する選好を高めるのか。本研究では、世論の戦争をめぐる態度や選好を、ジェンダー国際関係論の視角を導入して分析することで、これらの問いに答えることを目指した。とりわけ、本研究では、多様な社会観念の中でも、勇敢な男性兵士が脆弱な犠牲者である女性を救うという、『美しき魂－正義の戦士』のフレームに着目して分析を行った。

本研究を通して、この『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、戦争の正当性に与えた影響を、以下の二つの仮説群の検証に取り組むことで解明することを試みた。一つ目の仮説群で

は、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、自己利益に焦点を当てたフレームに比べ、世論の戦争に対する関心を高め(仮説1)、自国と他国をめぐる世界観を形成し(仮説2および仮説3)、戦争をめぐる選好を高める(仮説4)という仮説を設定し、その妥当性を検証した。この仮説の論拠としては、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、シンプルで理解の容易いフレームであることと、文化的共鳴性の高いフレームであることに言及した。

二つ目の仮説群では、この『美しき魂－正義の戦士』のフレームの影響力が、世論の戦争に対する関心・世界観・政策選好に与えた影響は、男性が保護者であり、女性が被保護者であるべきであるとする、伝統的なジェンダー観念に支えられてきたことを予想し、実証を試みた。二つ目の仮説群では、保護者である米兵が男性であり、被保護者の紛争地市民が女性であるという伝統的なジェンダー観念に沿った性別の組み合わせ(仮説5)、および、個人レベルのジェンダー・ステレオタイプに対する共感度の度合い(仮説7)が、一つ目の仮説群で検討した効果に影響することを予想した。さらに二つ目の仮説群では、保護者である米兵が女性であり、被保護者である紛争地市民が男性であることで、先進的なジェンダー観念を受け入れている女性の正当性が上昇することに言及した仮説も立て、実証を試みた(仮説6)。次節で述べるように、この仮説群については、限定的なデータの支持のみを受けることとなった。

本研究の意義は、以下の二点に求めることができる。第一に、本研究では、人々の日常生活を規定する社会観念の中でも、ジェンダー観念に着目することで、世論の軍事政策に対する選好をめぐる問いを解明することを試みた。これまで、人々の日常生活を規定してきた、人間社会を自集団と他集団に区分する世

界観の一つである、エスノセントリズムに焦点を当てることで、世論の戦争をめぐる選好をめぐる分析が行われてきた(Kam & Kinder, 2007; Kinder & Kam, 2010)。一方で、世論と戦争をめぐる研究は、ジェンダー観念については、ほとんどの場合関心を払ってこなかった。だが、軍事力の正当性とジェンダー観念は複雑に絡み合っている。ジェンダー国際関係論者が述べるように、軍事力の存在の正当性や軍事行為の正当性は、軍隊が男性によって構成される「男らしい」組織であることや、弱者である女性を守る組織であることに大きく依存してきた(C. Enloe, 1993)。弱者である女性のために英雄的に命を落とすという語りによって、男性は不承不承戦地に赴くことを受け入れてきたし(C. Enloe, 2000; Sjoberg, 2010)、このような英雄男性を称える女性によっても、戦争の正当性は支えられてきた(Elshtain, 1987; Goldstein, 2003)。そのため、本研究では、軍事力や軍事行為の正当性そのものを支えるジェンダー観念に焦点を当てることに意義があると考えた。

第二に、本研究は、ジェンダー国際関係論と、世論と戦争をめぐる研究を架橋することで、ジェンダー国際関係論と世論研究の双方に貢献する意義を持つ。今日、ジェンダー観念を分析視角として用いる有用性に着目し、ジェンダーの視角を導入しながら、定量手法や実験手法を用いた分析を行う世論研究が現れつつあるものの(Scott Sigmund Gartner, 2008a; Johns & Davies, 2017)、これらの手法を用いて、ジェンダー国際関係論における問いを主眼に置いて分析を行った世論研究は、非常に限られている。本研究では、実験手法や定量手法を導入しながら、ジェンダー観念が軍事力の正当性につながることをすることで、ジェンダー国際関係論と伝統的な世論研究を架橋することを目指した。